

滋賀県平和祈念館 第5回企画展示

学童疎開のモノ語り (会期：平成25年6月29日～9月29日)

大阪 から子どもたちがやってきた！

平成25(2013)年6月29日(土)～9月29日(日) 入館無料

滋賀県平和祈念館 第5回企画展示

学童疎開のモノ語り

■入館料＝無料 ■開館時間＝午前9時30分～午後5時
 ■休館日＝月・火・曜日(祝日にあたる場合は開館)
 ※7/18～8/31の期間は、休まず開館します

面会日。持ってきたドーナツは、大阪の味がした。

企画者 坂本正邦さん 資料より

滋賀県平和祈念館
 〒527-0157 滋賀県栗東市江下中野町411番地
 TEL: 0749-46-0300 FAX: 0749-46-0356
 E-mail: hwan@hwan.or.jp

チラシ表面

滋賀県平和祈念館 第5回企画展示

大阪 から子どもたちがやってきた！

学童疎開のモノ語り

今回の企画展では、集団学童疎開について紹介します。疎開を経験した子どもたちや、受け入れた滋賀の人びとの体験と資料から、子どもの暮らしを通した戦時中の出来事を、現在へと伝えます。

戦争が激しさを増す昭和19(1944)年8月31日から9月2日にかけて、大阪市内から、今の小学校3年生から6年生の子どもたちが、空襲の少なかった滋賀にやってきました。子どもたちは家族と別れて、友達や学校の先生とともに、地域のお寺などの寮で暮らし、地元の学校などに通いました。

疎開を支えた人びと

疎開先でのできごと

同時開催 少女が描いた絵画 収蔵展示

長浜市の武田倫江さんが国民学校(今の小学校)3年生だった昭和20(1945)年、終戦を迎えました。学校でのお絵かきの時間は、戦争のことをテーマにした絵を描くこともありました。まだ幼かった少女の描いた作品から、当時の子どもたちの暮らしを垣間見ることが出来ます。

アクセス

チラシ裏面



日増しに本土空襲が激しくなる中、子どもたちは空襲からのがれるため、家族と別れ、住みなれた町を離れて暮らさなければならませんでした。それを「集団学童疎開」と言います。家族と離れ、さみしい思いをしながら疎開をしてきた子どもたち。引率してきた大阪の学校の先生。受け入れた滋賀の人びとなど、大人も子どももすべてが巻き込まれた「集団学童疎開」という戦時の出来事を、体験と資料から現在へと伝えます。

プロローグ 集団学童疎開

―戦火を逃れてやって来た子どもたち―

日本国内での空襲にそなえ、東京、名古屋、大阪など大都市の子どもたちは、学校ごとに比較的安全な地方にまとまって移動し、生活することになりました。これを「集団学童疎開」と言います。

昭和19(1944)年8月31日から9月2日にかけて、大阪市内の東区、南区(ともに現在の中央区)、浪速区、北区から、今の小学校3年生から6年生にあたる子どもたち1万人以上が、滋賀県にやってきました。子どもたちは家族と別れて、友達や学校の先生とともに、地域のお寺などで寮生活をし、地元の学校に通いました。戦争が終わって、子どもたちがようやく大阪へ帰れたのは、昭和20年10月ごろでした。子どもたちを待っていたのは、空襲で焼けてしまった大阪のまちでした。



大阪市立中大江国民学校記章、疎開先へ持ってきたお茶碗

昭和19(1944)年8月31日、大阪市立中大江国民学校の5年生だった池田喬子さんは、集団学童疎開で五個荘町(今の東近江市)へやってきました。

このお茶わんは、大阪の学校で給食で使っていたもので、疎開の荷物のひとつとして持って来られました。池田さんにとって、辛い疎開先の生活で、なつかしい大阪の学校を思い出す、大切なお茶わんでした。

縁の部分に大阪市章、底には統制陶器(国により生産を管理された陶器)であることを示す印があります。

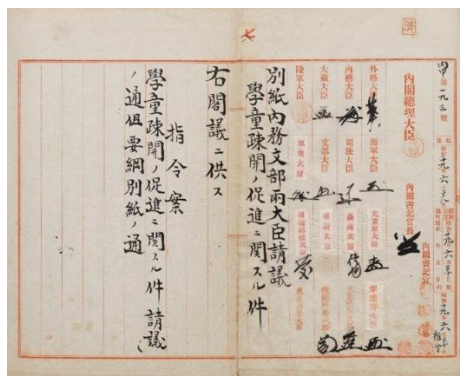
学童疎開とは

戦争が激しさを増してきた昭和19(1944)年。日本本土での空襲が増す中、防空対策のひとつとして子

どもたちの安全を守るために、東京をはじめ横浜、名古屋、大阪、神戸、小倉、門司などの全国13の大都市、工業都市に住む国民学校(今の小学校)の子どもたちを、個人的あるいは、集団で比較的安全な地域へ疎開させることを、同年6月30日「学童疎開促進要綱」として閣議決定しました。個人的に疎開(縁故疎開)できなかった子どもたちは、学校単位で集団で疎開させられました。これを「集団学童疎開」と言います。地域の長や学校長を通じて、保護者に対して自発的に申請するよう「強力に指導勧奨」が行われました。

同年8月から集団学童疎開が始まり、対象となった当初3年生から6年生までの子どもたちは、家族と離れて暮らすことになりました。集団学童疎開にかかる費用は、保護者が月10円負担し、身の回り品も各家で用意しなければなりませんでした。

その後、空襲の激化に伴い、翌20年には京都、呉などの4都市が疎開指定都市に加えられ、1年生、2年生も疎開の対象となり、約100万人の子どもたちが対象となりました。その結果、大きな都市では、子どもの遊ぶ姿が町から消えました。

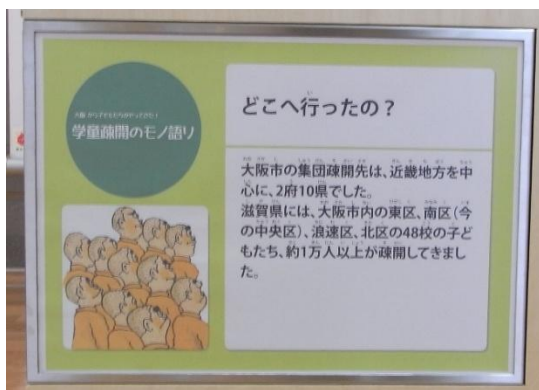


学童疎開ノ促進ニ関スル件

(昭和19年6月30日閣議決定) 国立公文書館所蔵



集団学童疎開関係書類綴り、集団疎開保護者連絡名簿、
集団疎開児童名簿、集団疎開保護者連絡名簿並に面会日割表



【大阪より：疎開先へ出発】

遠足の気持ちで滋賀県へ疎開

坂本正邦さん（兵庫県）

国民学校（今の小学校）4年生で、滋賀県へ疎開してきた坂本正邦さんは、当時の様子を書いた絵日記を、大切に残していました。その中では、疎開に出発した日のことをこのように書かれています。

「この絵日記は昭和19(1944)年8月31日、学童疎開のため大阪を出発する日から書いています。日記は最初は強制的に書かされたもので、先生に見られることを前提に書いたので本音は書けませんでした。しかし、うちの先生は見なかったですけどね。この時、ぼくは大阪市立御津国民学校4年生でした。当時心斎橋の橋のもとに住んでいて、その頃は大阪でもまだ空襲はなく、食料に不自由することもありませんでした。だから、親は泣いていたけれども、ぼくらは疎開するといっても、遠足の気持ちでレンタルでした。疎開先は滋賀県の甲良町、姉はそこから歩いて3時間ほどの多賀町でした。」



坂本正邦さんが、疎開で滋賀県にやって来た昭和19(1944)年8月31日から書かれた日記

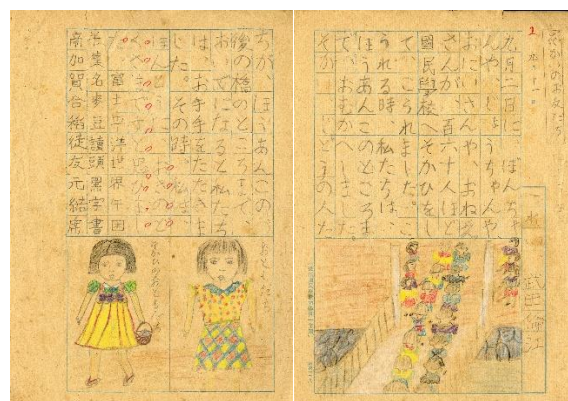
（昭和十九年）八月三十一日（水）

今日は、いよいよ「しうだんソカイ」の出発日。朝お父さんやお母さんに送られて、学校を出発し、長堀から市電に乗って大

阪駅へ向かった。「兵隊一ごうしゃ」で、四つの学校があつまった。十一時三〇分「リンジ」の汽車に乗って「ヒコネ」へと急いだ。京都をすぎ、おおつをすぎると、「ビワコ」が見えた。見わたすかぎりみどりの向こうに、青いものが見え、白ほがあらこちらにうかんでいた。汽車の窓から外を見ると、子供らが手をふっていた。とうとう「ヒコネ」へついた。電車に乗って「アマゴ」へいった。駅をおりと、西甲良国民学校の生とが荷物を持ってくれた。それから、きんじょうのうじ神様でしきをした。しきがすむと風呂へ行った。織田君は、風呂の下へひくいたを、「これどうしますのーん」といいました。中ざわのおじさんが「その●[欠損して不明]を取ってはいるとやけどするぞ」とおっしゃいました。〔坂本正邦さんの絵日記より〕

そかいのお友だち 九月十一日

九月二日に、ほんちゃんや、じょうちゃんや、おにいさんや、おねえさんが、百六十人ほど国民学校へそかいをして、こられました。こられる時、私たちは、ほうあんこのところまで、おむかえしました。そかい、じどうの人たちが、ほうあんこの、後の橋のところまで、おいでになると私たちは、お手手をたたきました。その時、私は、ほんとうに、おきのどくさまですと思いました。〔武田倫江さんの絵日記より〕



武田倫江さんの絵日記（昭和19年9月11日）



[大阪より：引率の先生]

引率者として、大阪からマキノ町へ

由上龍男さん（大阪府）

昭和19(1944)年、当時25歳だった由上龍男さんは、大阪市北区の菅南国民学校に勤務していました。同年9月2日から集団学童疎開が始まり、4～5年生の女子児童の担任として、大阪駅から特別列車とバスを乗り継いで、疎開先である海津村（今の高島市マキノ町）へとやって来ました。

「私たちと一緒に特別列車で行ったのは、菅南、堀川、西天満、堂島、これだけの学校が一列車編成で行ったんです。私らが参りましたのは、海津村ですから、昔の海津国民学校へ疎開しました。」

海津村では、最初お寺で寝泊りをしていましたが、びわ湖近くの民家に移りました。

「最初はお寺だったんですが、子どもたちが怖がってね。そこで村長さんが、宿替えしてくれてね。南に出たら浜で、裏は通り道で、ほんで民家の並ぶ中ですから、まあ、女の子としては落ち着くことができました。」



近江今津駅到着 由上龍男さん提供



いよいよ着きました 由上龍男さん提供



出発式 先生、では元気に行ってまいります 由上龍男さん提供



海津少年団に迎えられ 由上龍男さん提供



校長先生の訓示をいただいて 由上龍男さん提供



海津国民学校着 由上龍男さん提供



疎開児童たちの写真（8枚） 由上龍男さん提供

第1章 学童疎開を支えた人びと

疎開地での生活は、慣れない場所での不自由な苦しい生活で、厳しい寒さにも耐えなければなりません。大阪に帰りたいと、さみしい思いをしている子どもたちが楽しくすごせるようにと、引率の先生をはじめ、お世話をしていた寮母さんは気を配っていました。子どもたちを支えた地域の人びとは、家事や食糧の提供などをおこない、子どもたちの生活を支えました。



バナー写真：昭和20年大阪南大江国民学校5年生疎開児童
日野町にて寮母さんとともに 玉八初子さん提供

〔滋賀より：愛情を持って接した寮母さん〕

疎開児童の寮母として、保健衛生を担当

玉八初子さん（日野町）

玉八さんは、日野尋常高等小学校を卒業後、14歳から八日市（今の東近江市）の松原鉄工所現場事務所に勤めました。しかし、町役場から保健衛生面を担当する寮母として働くよう依頼があり、彦根で準看護婦としての教育を受けました。昭和19（1944）年8月、大阪市立南大江国民学校の4年生男子約30名が先生と一緒に、日野町に疎開して来ました。疎開先は松尾町の能楽堂・観風社（今の滋賀銀行日野支店）です。保健衛生担当だった玉八さんは、駆虫剤を飲ませたり、子どもの健康にはいろいろ気を使いました。「毎晩、具合が悪いとか怪我をしたとかの子どもはいないか診て上げます。痛くなくても『ここが痛い』と言って来ます。私は『そうなの、そうなの』と薬を塗って上げます。すると子どもは、納得して寝てくれるんです。子どもたち、両親と離れて寂しかったのでしょね。」



左：疎開の子どもたち日野駅に到着 玉八初子さん提供

右：疎開の子どもたちや先生と寮の前で 玉八初子さん提供

〔滋賀より：愛情を持って接した寮母さん〕

再疎開先で空襲に遭う

山口とし子さん（守山市）

愛知県の瀬戸で育った山口さんは、昭和19（1944）年9月から、ご縁のあった大津市の持明寺で、集団疎開してきた大阪市難波の栄国民学校の子たちの寮母になりました。決められた面会日には、たくさんの家族が会いに来られました。

「面会日には、親がようけ来はるやろ。ようけご馳走こしらえてきて、食べさしたりしはる。私らにも、

手みやげなんかよう持ってきてくれはった。手に入らんようなものをね。」

その後、昭和 20(1945) 年の 3 月には、大津も空襲の恐れがあるとのことで、守山の永願寺に移ることになりましたが、同年 7 月 30 日、守山で空襲に遭いました。

「守山駅はもう、すぐそばやし、あの時は肝をつぶしたな。子どもも無事で、それから警報が解除になったさけ、無事やったけど。みんなおしっこびつたり、しばらく立てなんだな。怖がって。」



昭和 20 (1945) 年春、膳所国民学校で疎開の子どもたちと
(後列左が山口とし子さん) 山口大介さん提供



〔滋賀より：地域の協力者〕

集団疎開児童の寮

H さん (東近江市)

法徳寺の H さんは、大阪市浪速区の久宝国民学校 5、6 年生の男子 25~30 名程度を受け入れていました。本堂前の大広間で子どもたちは寝起きをして、昼間は教室にもなりました。夜の明かりはローソクだけで、食堂は庫裏の部屋二つを開け放して使いました。子どもたちの日課は、借りた畑を耕すこと。そして、

前の神社の広場に、空襲のときに逃げ込む幅 1 メートル長さ 10 メートルくらいのみぞを掘ることでした。

「カボチャとかお粥とか、水分の多い食物ばかりだったから、夜中に寝小便をしてしまう子どももいてね。私も子どもを 2 人かかえて、毎日が大変なときでした。今だったら、もっと十分なことがしてあげられたのになあ。」

〔滋賀より：寮の住職〕

自宅へ疎開児童を受け入れる

沙加戸圭夫さん (大津市)

昭和 19(1944) 年 9 月から昭和 20(1945) 年 2 月ころまで、自宅の響忍寺で大阪市立芦原国民学校の 3 年生(25 人位)を受け入れ、沙加戸さんが塾長、夫人と妹が寮母となりました。受け入れてすぐの 10 月 5 日、疎開児童の配給米 1 斗 7 升が盗難に遭い、再度配給してもらったことがありました。鍵などをかけていなかったのが、原因のひとつと考えられます。その後、大津でも空襲の危険があるとのことで、子どもたちは栗東市大橋(当時、葉山村)の慶崇寺へ移動して行きました。当時、4 歳だった息子の明さんは、子どもたちに遊んでもらったり、一緒に写真を撮写したりしていました。

「戦争時は『魔術にでもかかったようなものだった』と思う。お寺でありながら、児童に仏法を説いたりできなかった。紙芝居などを見せたりしたけど、内容は戦争物ばかりでした」

〔滋賀より：地域の協力者〕

婦人会の当番でお世話を

奥村わ江さん (日野町)

昭和 19(1944) 年の秋、奥村さんの住む日野町にも疎開の子どもたちがやって来ました。地域の婦人会でも、子どもたちのお世話をしたので、奥村さんも手伝いに行きました。

「お洗濯にね、当番がまわってきてよう婦人会で行了きました。もうその時は、お風呂も十分に入れませんし、虱[シラミ]がたくさんわきましてね。大きいお釜にお湯わかして、その熱湯かけてね、衣類の虱の消毒してあげたり、ようお洗濯やらに寄せてもらっ

たことがあります。あのね川へ行ったら、川にいよったカエルをつかんで両足持って引き裂いてよい身をかじってやった。あんな見たら涙がこぼれた。『帰りたい』言うて泣かへるし、寮母さんら困られたですやろ。親がよく面会に来やりましたわ。ここへも来やりました、お礼に、帰る時にね。全部ではないし、両親がお礼に来られたのは、4〜5軒でしたけどね。」



シラミ (虱) ってなに?

実際の大きさはこれくらい【体長2〜4mm】

シラミとは、人の毛の中や服に住みついて、血を吸う昆虫です。血を吸われると、とてもかゆくなります。

ヒトに寄生するシラミには、アタマジラミ、ケジラミ、コロモジラミの3種類があり、集団発生するのはアタマジラミです。アタマジラミは、頭髮に寄生し、頭皮から吸血してかゆみや湿疹などを起こします。

参考：厚生労働省国立感染症研究所ホームページ

【滋賀より：寮だったお寺の子供】

自宅が疎開児童の寮に

禿 住子さん (栗東市)

禿さんの自宅の専光寺は、昭和 19(1944) 年から昭和 20(1945) 年にかけて、大阪市立恵美国民学校(今の小学校)の2年生と3年生の学童疎開の子どもたちの寮になりました。当時、禿さんは4年生でした。学校ではほとんど一緒に遊びませんでした。家に帰ってからは専光寺の境内で女の子と石けりや、おじゃみ、竹で4、5本を手の平にのせたりする遊びを一緒にしました。

ある日、女の子が家からの差し入れの「かきもち」を禿さんの所へ持ってきて「お姉ちゃん、これ焼い

てくれたら1枚あげる」と言いました。しかし、先生から「差し入れなどあったら皆で分けて食べましょう」と言われていたため、女の子の申し入れを断りました。

「何で、もう少し柔軟に対応してあげられなかったのかと、今でもそのことを後悔しています」

【滋賀より：寮だったお寺の子供】

疎開で来たお姉ちゃんたち

Yさん (長浜市)

Yさんの自宅である残景寺は、疎開の子どもたちの寮となり、2つほど年上の女の子が20名ほど暮らしていました。当時、子どもたちの生活は、勤労奉仕と遊びが中心で、勉強はほとんどありませんでした。甘いものが欲しいとおねだりしたり、夜になると寂しくて泣き出す子どもたちの話を聞き、心の支えになっていたのは、Yさんのお母さんでした。

しかし、中には元気のいい子もいて、年下のYさんはあまり一緒に遊びませんでした。

「ちょっとお姉ちゃん、怖かったわ。中には、私をからかって、雪玉を投げてきたりして、やんちゃやったんですわ。その人は、あちこち走り回ったり、いろんな木の実をもらったり、女の子やのに木に登ったり、なわとびとか缶蹴りとか、私は蹴られたら怖いからあんまり入りませんでしたけど、そんなことが思い出されますね。」



疎開の寮で使用した「久宝校」の焼印がある手製の一升ます、疎開の子どもたちが使用した食器

【滋賀より：地域の子ども】

学童疎開の子どもたちを迎えて

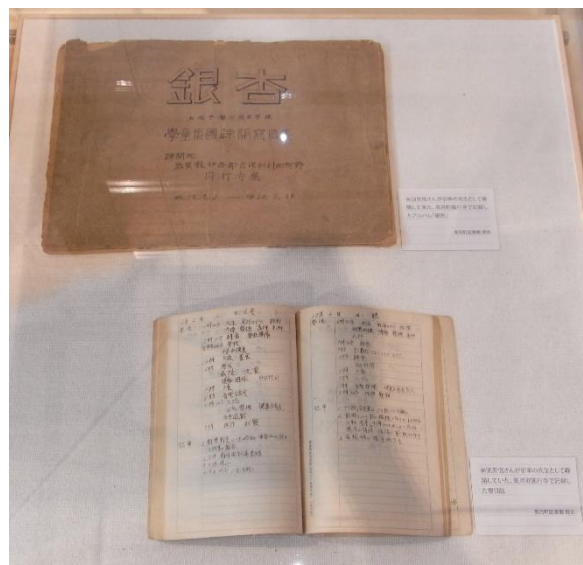
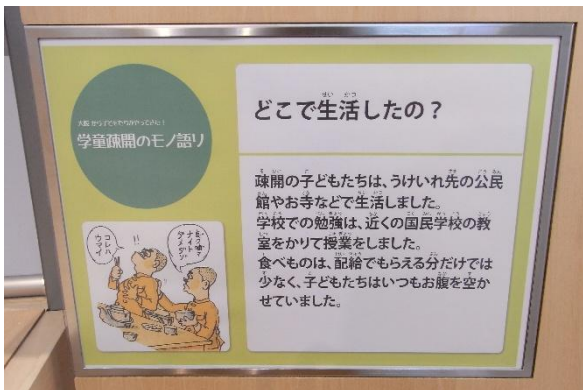
H子さん（日野町）

日野町の南比都佐国民学校に通っていたHさんは、昭和19(1944)年の夏、大阪からやってきた学童疎開の子どもたちを迎えました。当日は、疎開の子どもたちがバスで来るのを学校の玄関で待ち、旗を持ってみんなで出迎えました。学校では、教室も授業も別々で、一緒にいるのは朝礼と朝の掃除ぐらいでした。

「大阪から知らん土地に来て、友達の中に入り込むということはなかなか勇気のいることでしたやろしね。子ども心に、疎開の人たちに何かしてあげたいと思ったかなあ。友達と『行こか』言うて、疎開の人の部屋に遊びに行きましたわ。ほんで行くと、廊下のとこで、『おいで、おいで』と手招きすると来やはって、玄関やら、運動場で遊んでたように思いますわ。疎開の人は、やっぱりパリッとした洋服を着てはりますし、勉強もようできはるよう見えまして。」



大阪市立北大江国民学校延光院寮の門標



米田芳信さんが引率の先生として疎開して来た高月町圓行寺で記録したアルバム「銀杏」と「寮日誌」



「銀杏」と「寮日誌」の複製品（閲覧用）

【滋賀より：寮を提供】

明大寮のこと

Iさん（高島市）

Iさんのお父さんは、Iさんが明治大学へ通学していたご縁で、海津(今の高島市)に所有していた土地を、大学のボート部へ寮として提供していました。戦時中は、村長だったお父さんが学童疎開を受け入れ、寮として利用していました。お父さんは、疎開の子どもたちのお世話もしていました。

「戦時中は、塩も敦賀まで一升ビンを持って行って、塩水をくんで、持って帰りおったんです。敦賀まで行って、よく機銃掃射に遭ったことがあるんですわ。」

『お前、行こか』と言って、それで向こうで塩水を入れて持って帰って、塩辛いのを利用して味付けしたりしてたんです。上から機銃掃射されてビックリして山の中に隠れたりして。上からタンクを積んでるのを見たら、『何しとんのやろ』と飛行機に乗ってる者は思ったんでしょうね。」

[滋賀より：愛情を持って接した寮母さん]

明大寮の寮母

狩野艶子さん（長浜市）

狩野さんは、大津で寮母としての講習を受けたのち、大阪市立菅南国民学校の明大寮の寮母として子どもたちを迎えました。

「寮母というのは、子どもさんたちの母としての愛情を持ってお世話するということを指導されたわけなんです。」

その後は、寮の子どもたちの部屋のとなりに住み込み、一緒に生活をしました。子どもたちに規則正しい生活をさせる一方で、愛情を持って母のように子どもたちには接していました。

「戦争中ですから、親が戦死したりした子がね、たまにありますわ。ほと、そういう子は、親の面会の度にね、寂しそうな感じがありますわ。親の面会もないし。そういう子は、見てられませんか。そうすると、私が連れて帰ってね、『あんた、親がなくてもな、私のとこに来てな、食べれるだけ食べや』言うてな。子どもも、『もう親がなくてもええわ』というてね、喜んでくれましたわ。」



「明大寮の子どもたち」

由上龍男さん提供

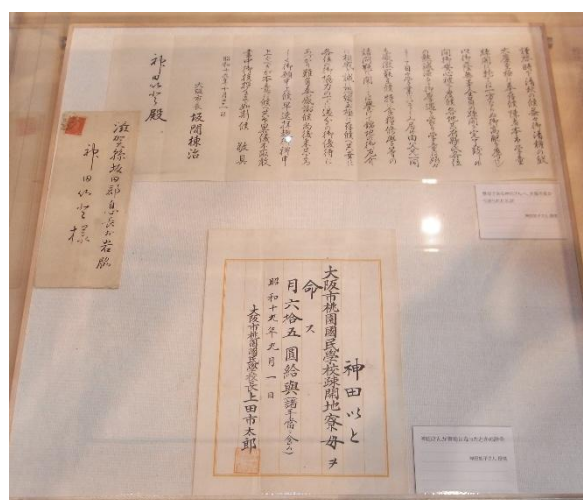


「大漁競う」

由上龍男さん提供



「大阪市桃園国民学校疎開児童宿舍」門標



寮母である神田さんへ大阪市長から送られた礼状、

神田さんが寮母になったときの辞令

〔滋賀より：愛情を持って接した寮母さん〕

疎開児童の寮母として共に暮らした7か月

吉坂ちゑさん（甲賀市）

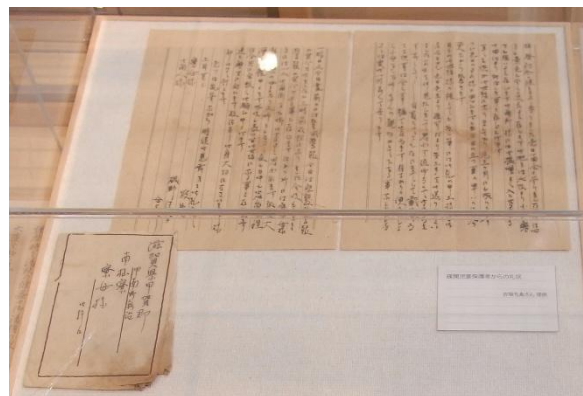
学童疎開児童の寮母になった吉坂ちゑさんは、昭和19（1944）年9月1日に、現在の甲賀市甲南町へ疎開してきた大阪市立稲荷国民学校4年生の女の子24人と一緒に生活しました。大阪を出発した時は、遠足にいくような楽しい気分だった子どもたちも、夜になるとさみしくなり、みんな泣き出しました。吉坂さんは、そんな子どもたちを自分の家族のように思っ

て世話をしました。
「自分の妹がにわかに増えたなという気がしてね。お母ちゃんのそばにいたら、あの子らももっと甘えられるのになあと思って。できるだけことはしてあげようと思いました。」



上：疎開当日、下：薪あつめ

吉坂ちゑさん提供



疎開児童保護者から寮母の吉坂さんへの礼状



第2章 疎開先での出来事

大阪から遠い滋賀で暮らすことになった子どもたちは、地域のお寺などの寮で生活しました。最初は、遠足に行くような気分で喜んでいましたが、時間が経つにつれ、家族と離れた生活に、これからどうなるのかと不安になっていきました。さみしさや空腹、慣れない農作業の中でも、家族への手紙には「がんばっている」としか書けませんでした。



昭和19（1944）年、疎開先の息長村（米原市）の天の川河原にて大阪市立桃園国民学校5年生男子 長野景昌さん提供



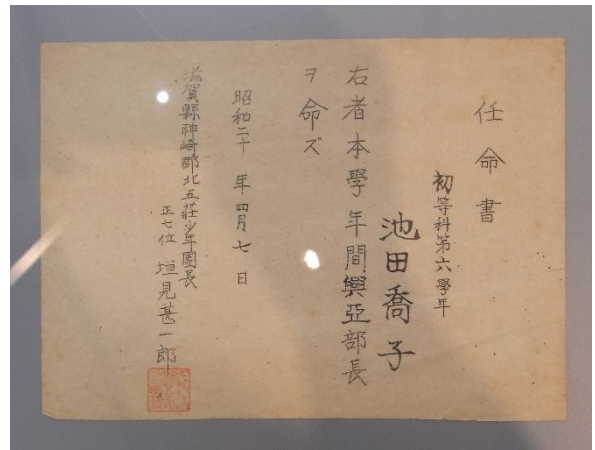
昭和19（1944）年、疎開の寮だった明徳寺にて大阪市立桃園
国民学校3・4年生女子 長野景昌さん提供



疎開当時、6年生の寮だった宝福寺 長野景昌さん提供



疎開先の箕浦橋のたもとで友人と（右側が長野さん）
長野景昌さん提供



6年生のときにみんなのお世話係として任命された「興亜部長」の任命書



疎開当時、5年生男子の寮だった公会堂（現在は空き家）
長野景昌さん提供



パナール写真：学童疎開の子どもたち 高月図書館提供



池田喬子さんが疎開先へ持ってきたもの

お守り、書道用水差し、おはじき、裁縫道具(はさみ、糸巻き)、
「大東亜」貿易ゲーム盤

[大阪より：疎開先での出来事]

おやつが欲しかった

Fさん（東近江市）

大阪市立南大江国民学校(今の小学校)に通っていたFさんは、日野町へ疎開し、観風社で暮らしました。学校では、勉強はほとんどせず、農作業などばかりをしました。食糧は日増しに少なくなり、いつもお腹を空かしていました。

「ただおやつが欲しい、それが何よりの欲求でして、仲間との中での争いもありました。おやつ代わりに栄養剤『わかもと』を、一瓶一晩で食べた仲間もいたんです。ときどき、非常に近所で大事にしていた家があって、ぼくもよせてもらっておやつをもらいました。」

寮母さんは、仕事の合間にいつも子どもたちに気を配ってくれました。

「寮母の玉八さんは、霜焼けには薬を塗ってもらったり、話相手になってもらったり、とってもやさしい方でした。我々の学校は男子校ですから、男の子の中でお姉さんのように慕っていたのではないかと思いますわ。」



右：今、市販されている「強力わかもと」

左：滋賀新聞に掲載されていた「わかもと」広告

集団学童疎開にきた子どもたちは、空腹のあまり錠剤の「わかもと」を食べました。

中には、一晩で一瓶食べてしまった子どももいました。

わずかな手持ちのお金で、滋賀で購入した子ども。

大阪の家族から、送ってもらった子ども。

「お腹が痛い」と、寮母さんにねだった子ども。

さまざまな手段で手に入れた錠剤は、ひと時でも空腹を満たしてくれたのでしょうか？

[大阪より：疎開先での出来事]

悔しかった相撲大会

Rさん（大阪府）

大阪市の船場で育ったRさんは、大阪市立久宝国民学校へ通っていました。昭和19(1944)年8月31日、Rさんが6年生の時に、近江八幡市へ集団学童疎開してきました。

学校では、地元の子どもたちとの交流会もあり、運動会や相撲大会を一緒に行いました。

「私は国民学校のとき、わりに体大きいほうだったんですよ。いつもね、力自慢だったんですね。ですから、相撲大会ではいつも駆り出されてね。キャプテンで。でも、いつも地元の子のキャプテンに寄り倒されてね。八幡の人は、力がみんな強いなあ思いました。やっぱり、いろいろと力仕事してはるんでしょね。ですから、都会っ子で、何もそういう運動もあんまりしてない人間では、とても太刀打ちできないということをね、つくづく思い知らされました。」



Rさんたちの寮だった旧中央公会堂

(今の近江八幡ユースホステル)

Rさん提

Figure 1: A photograph of an open manuscript showing handwritten Japanese text and diagrams. The left page contains a grid of numbers and a small diagram of a boat. The right page contains a large diagram of a boat and a smaller diagram of a boat. The manuscript is bound in the center, and the pages are yellowed with age.

An exhibition display on a light-colored wooden surface. At the top is a blue rectangular sign with white Japanese text. The sign has two columns of text at the top: "きからじ" (Kikaraji) and "えにっき" (Enikki). Below them is the title "坂本さんの絵日記" (Sakamoto-san's Picture Diary). A circular graphic on the left contains the text "みてみよう!" (Let's look!). The main body of the sign features three illustrations: a small picture of a diary page, a cartoon of two men talking, and a speech bubble from one of the men saying "おや、おや、おや。さかたのうちは、どうしてこんなことを書いてあるでしょう?" (Oh, oh, oh. Why is Sakata's family writing such things?). Below the sign is a copy of the book "坂本さん日本八景一日木" (Sakamoto-san Nihon Hachijō Ichinichi Ki), which shows a traditional Japanese landscape with a red gate and a bridge. The book cover also includes the text "間寛寿" (Ma Kanasu) and "坂本正樹さん 絵画展".

京都府立総合資料館の展示風景。左側には、歴史的な文書や書状が展示されている。右側には、伝統的な日本の茶道具（茶碗、茶托）が展示されている。

A museum exhibit titled "疎開児童" (Evacuated Children). It features two mannequins dressed in historical clothing: a boy in a brown jacket and cap, and a girl in a dark kimono and patterned skirt holding a long wooden staff. Behind them is a large black and white photograph of children in a classroom. In the foreground, a low wooden table displays various historical items, including books, a red object, and a small sign with a warning symbol. The exhibit is set on a wooden floor with a dark rug.

【大阪より：疎開先での出来事】

お父さんからの手紙

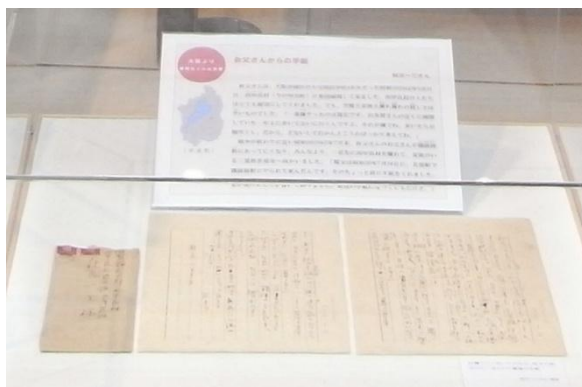
秋元一三さん（大阪府）

秋元さんは、大阪市南区の大宝国民学校4年生だった昭和19(1944)年8月31日、西甲良村（今の甲良町）に集団疎開して来ました。西甲良村の人たちはとても親切にしてくれました。でも、空腹と家族と離れ離れの寂しさは辛いものでした。

「一番嫌やったのは遠足です。お多賀さんの近くに疎開していた一年上（の上級生）に歩いて会いに行くんですよ。それが嫌でね。歩いたらお腹空くし。だから、どないして行かんとかうかばっかり考えてね。」

戦争が終わりに近い昭和20(1945)年7月末、秋元さんのお父さんが機銃掃射にあって亡くなり、みんなより、一足先に西甲良村を離れて、家族のいる三重県名張市へ向かいました。

「親父は昭和20年7月24日に、名張駅で機銃掃射にやられて死んだんです。そのちょっと前に手紙をくれました。家が焼けたことが書いてありました。最後の手紙になってしもたけど。」

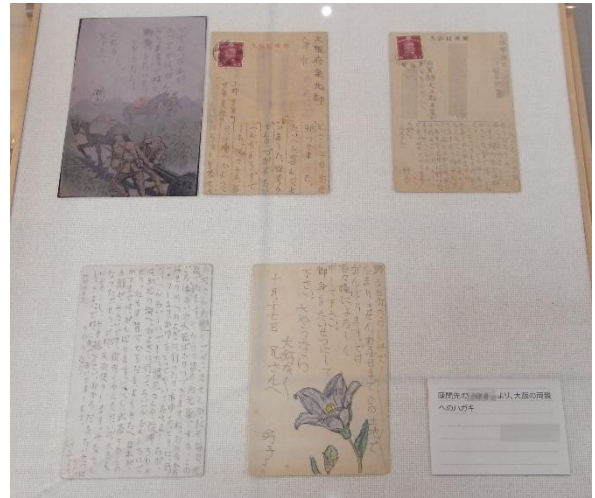


父から秋元一三さんへの最後の手紙



疎開の子どもたちが使用した竹製ものさし、手製の机、

武運長久えんぴつ・箱、日本海軍えんぴつ

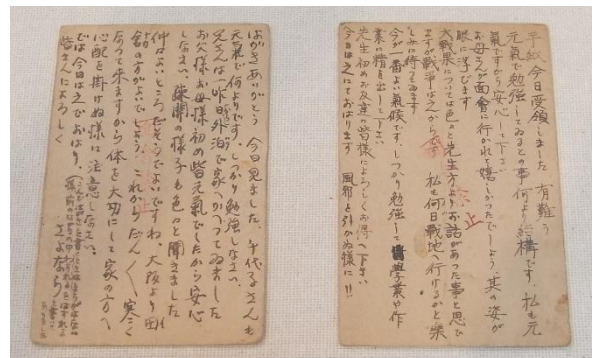


疎開先のM子さんより大阪の両親へのハガキ



疎開先で、初めての面会日記念

宮川千代子さん提供



兄から疎開先の宮川千代子さんへ送ったハガキ



疎開先の園木邦子さんより大阪の両親へのハガキ

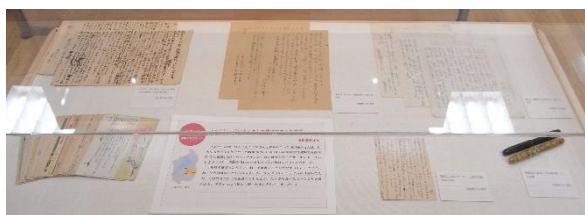
〔大阪より：疎開先での暮らし〕

「がんばっている」としか書けなかった手紙

池田喬子さん（大津市）

大阪で、両親とひとつ上のお姉さんと暮らしていた池田喬さんは、中大江国民学校5年生だった昭和19(1944)年8月31日に集団学童疎開で五個荘町(今の東近江市)へやってきました。最初は楽しかった集団生活も、さみしさがつのり、空腹や慣れない農作業で辛い毎日になっていきました。

「毎日手紙ばかり書いてね、手紙書くことしかなかったん。せやけどね、泣き言は書いたらあかんからね、がんばってることばかり書いてたね。今日はさつまいもを食べましたとか、たくさん食べたようなことを書いたり。子ども心にも親に心配させまいと思ってました。」



一足先に大阪へ戻った姉から滋賀に残る池田喬子さんへ送った手紙、父から疎開先の池田さんへ送った手紙、母から疎開先の池田さんへ送った手紙、疎開先の池田さんより大阪の両親へのハガキ等、疎開先で家族への手紙を書いた万年筆

〔大阪より：引率の先生〕

海津の生活

由上龍男さん（大阪府）

大阪市北区菅南国民学校の先生をしていた由上龍男さんは、昭和19(1944)年9月2日、子どもたちを引率して現在の高島市マキノ町へ集団学童疎開でやってきました。由上先生の担当は、4年生と5年生の女の子。昭和20(1945)年4月に他の先生と交代するまでの7ヶ月間、お父さんやお母さんと離ればなれで生活する子どもたちがさみしくないようにと、自然を楽しむように外へ連れ出し、琵琶湖で遊んだり雪遊びをしたりしました。

「一番苦労したのは雪かきです。寮の裏側が道なんです、この道の雪かきをせな、よそさんの迷惑に

なる。雪の階段で屋根まで上がらんならんかった。雪の階段で2階に上がっている感じは、いまだに忘れません。」



由上龍男さんが引率の先生として疎開していたマキノ町で記録したアルバム



由上龍男さんのアルバムより

〔大阪より：引率の先生〕

ノミや虱[シラミ]と寒さに悩まされた日々

Nさん（大阪府）

昭和19(1944)年、Nさんが32歳のとき、大阪市立中大江国民学校4・5年生の引率として、北五個荘(今の東近江市)へやってきました。淡海高等女学校の寄宿舎だったところが寮になり、Nさんは女の子を担当しました。地元の方の協力もあり、決して裕福ではありませんでしたが、食糧は何とかなりましたが、ノミや虱には苦労させられました。

「冬は冷たいのんと霜焼けで、夏は虱とノミが辛かったですね。殺虫剤かてありませんやん。八日市までお薬を買いに行ってもろて。その時分は除虫菊しかあらへんし、たくさん売ってへんのですわ。それにまいても、どこか隠れよるだけで、えらい事でしたねえ。ジフテリアにかかった子が一人いました。死にかけました。手術してもろて、助かりましたけ

どね。後はおねしょと、食べつけへんもんを食べておなか壊したり、反対に便秘したりでした。」

[大阪より：疎開後]

帰った大阪は焼け野原だった

I 子さん（大阪府）

昭和 20(1945) 年 3 月 13 日、大阪のまちは激しい空襲のため、たくさんの家が焼けてしまい、多くの方が亡くなりました。

集団学童疎開で滋賀県甲南町に来ていた I さんは、この空襲でおじいさん、お母さんを始め、妹や弟たちの 6 人の家族を失いました。

「行く時は家族がたくさんいてたんですけども、家に帰ったらいませんでした。父親は防犯の団長をして、その時家にはいてなかったね。父親はみんなを助けることができなかったんです。私は集団疎開で助かったんで、その後は父と 2 人です。行く時は両親も弟たちも、みんないたんですが。もう、つらい。戦争はつらいです。」



大阪市督学官が引率教員（Y さん）に送った励ましの手紙・ハガキ、写真「引率した疎開の子どもたち」



引率した疎開の子どもたち

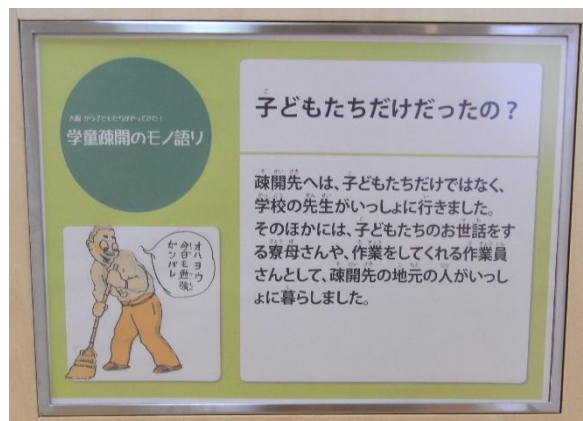
Y さん提供



同級生と記憶をたどって作成した大阪市立久宝国民学区復元地図

R さん

提供



[大阪より：南松[みなみそま]寮疎開の子ども座談会]

甲南町南松寮での思い出①

中野由紀子さん・石井弘子さん・園木邦子さん・
宮川千代子さん・大海幸夫さん・I 子さん・
K 子さん・M 子さん・W 子さん

昭和 19(1944) 年、大阪市浪速区の大阪市立稲荷国民学校 4 年生だったみなさんは、甲南町へ学童疎開にやってきました。

同窓会でお集まりになったときに、当時をふり返り、お話をおうかがいしました。

疎開へ行く

園木：疎開へ行く 1 週間ほど前に、疎開の集まる練習をしました。それはもう、どこか遠足へ行くような楽しい気分で行ったのを覚えています。

中野：なんかもう、行かなきゃいけないという情勢でしたので、いやというわけにはいかないしね。

でも、滋賀へ行く時は、まるで遠足のように喜んで楽しい気分で行きました。何も知らないんで行ったんですからねえ。

宮川：行ってみると寂しいて、夜になったら、どこかでしくしくとね。1人泣き出したら全員が泣いて。

M子：そしたら向こうの方で汽車がポーッと鳴って。その音聞いて、みんな泣いたね。

K子：そしたら吉井先生が学校の作法室みたいなどこへ連れていって、「泣きたいだけ泣きなさい」言われて、みんな一斉にワッと泣いて。で、あれからみんな吹っ切れたのか、普通の生活に戻れたような気がしますね。

全員：そうそう、私も覚えてる…。

滋賀での生活の始まり

M子：実際に、大阪とは全く違う甲南町に着いた時、ビックリしたねえ。覚えてるのは、着いた時コスモスの花が寮の横にずっと、色とりどりに咲いててね。おばさんとか、近所の方が出迎えてくれたね。

園木：滋賀では、まず朝起きたら体操。建国体操うのをするんですよ。

中野：寮の前にみんな並んでね、毎日やるんですよ。体操のメロディも覚えてるわ。建国体操だから、にぎりこぶしでエイ、ヤッって。それを土地の人たちは見たことないから、不思議そうに見てるの。そんな生活のこととかを、先生たちが『疎開だより4年生』にして、私たちの留守宅に送ってくれてました。

一番怖かったこと

石井：1番怖かったのは、お弁当当番で邦ちゃん（園木さん）と2人で取りに行ったときに空襲にあったことです。寮にお弁当を取りに行ったら、学校に戻る道すがらに、飛行機が低空で飛んできて、機銃掃射で。畑の中でお弁当を抱っこして、しゃがんでたのを、今思い出しました。

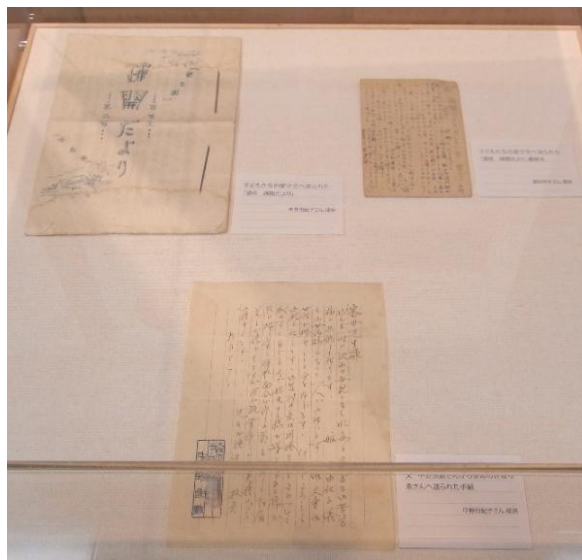
園木：そんなことあった？

石井：あったよ。取りに行ったら帰る時空襲に遭って、あんな田舎に疎開してて、「私たち命を落とすのか」と、子ども心に思いました。

大海：私も記憶あるよ。僕ら、山の上におったでし

よう。目の前をね、グラマンが2機ダーッと行きてましてね、バリバリとやりました。たぶん同じ経験だと思います。

石井：こんなところで死んじゃおられないって、子ども心に思いましたよ。



左上：子どもたちの留守宅へ送られた「通信 疎開だより」

右上：子どもたちの留守宅へ送られた「通信 疎開だより」

最終号

下：父 中野良数さんから寮母の吉坂ちゑさんへ送られた手紙

【大阪より：南杣寮疎開の子ども座談会】

甲南町南杣寮での思い出②

中野由紀子さん（大阪府）たち

初めての面会日

園木：面会後の別れの時はね、私たち田んぼの畦道に一気にずーっと並んでね。ちょうど、家族の帰る汽車を見送って。夕暮れに汽車を見送ったのをはっきり覚えてます。そばにいたら、みんな別れがづらいから。

宮川：田んぼの畦道で、並んで手を振って見送って、別れましたよ。つらかったよね、あの時は。

中野：今の4年生の子を見ると、考えられないですね。

K子：そうですね。私の孫が4年生の時に「お父さんとお母さんと離れて行ける？」って聞きましたが、「よう行かない」言いますね。両親と離れてゆうのは、ダメみたいですね。そんなんよう行かんわ、全然ダメゆうてましたわ。

さまざまな思い出

M子：私ら、お風呂とかで使うマキは、山へ取りに行ったね。

K子：山なんかに行きましたよ。こんな細い山道通って。

中野：それに、「ツギにする布切れを送ってくれ」って、手紙にいっぱい書いたのを覚えています。

園木：それから肝油とか、「わかもと」とか送ってくれて。

大海：薬として飲んだんじゃないくて、お菓子だったんです。

園木：「自宅でもない中、苦勞してるから大切に」って念押しした手紙と一緒に送って来ました。皆さんと分け合って食べてくれゆうて、分量はわずかなけど。苦勞させたんやね。

地元とのふれあい

中野：滋賀県の方はおとなしいし、大阪の子が集団でガツと寄ってるところへは、なかなか。言葉も違うし。

M子：私に記憶があるのは、寮母さんがよくイナゴを捕って下さいゆうて、布袋を渡さるんですけど、虫が怖いからよう捕らなくってね。困ってたから、地元の同じくらいの人が、「捕ったげるわ」ゆうてね。見てる間に捕ってくれはって、喜んで帰ったの覚えてるんですよ。すごくうれしかったです。

大海：子ども同士で話をする機会はありませんでしたが、石の投げ合いとか、ケンカはしました。男ですから。村の人たちは非常に親切で、時々手伝いに行ってくれてですね、稲刈りの体験をしたりイナゴ捕りをしたり。その時にアゼでよばれたおはぎが、もうめっちゃくちゃうまかったですね、まともな物食ってなかったから。

I子：食事のことですけどね、「あんたらは結構やよ、寮の男の子はかわいそうですよ」って言われました。

中野：お隣の木村のおじさんが、毎日リヤカーを引いて、村の中を、私たちのために食料調達して下さったのですよ。だからすごい幸せで、食べる物がないとか、ひもじい思いをしたことないんですよ。男の人は山の上の寮でしょう。土地との

繋がりがいいんですね、直接。

I子：だから「かわいそうです」って、ゆうてましたわ。土地の人とのふれあいがいいから。

中野：寮母さんもほんとにやさしくって、みんなに平等で、その物静かで優雅なお婆さんと、吉坂のお姉ちゃんは、ほがらかで明るくって、私たちが落ち込まないようにいつでも明るい声で接してもらったから、つらいこともいっぱいあったけど、よくしてもらったという思いの方が強く、感謝の思いでいっぱいです。

【大阪より：疎開の子ども座談会】

愛荘町信光寺での思い出①

木津龍尊さん・鳥居徳三さん・久保田庄次さん・Rさん・Sさん・Tさん・Mさん・Zさん・Hさん・Kさん

昭和19(1944)年、大阪市立精華国民学校4年生だったみなさんは、愛荘町東円堂の信光寺（住職：木津龍尊さん）へ学童疎開にやってきました。しかし、翌年の3月31日には、突然西小椋村（現在、東近江市）へ移動することになりました。同窓会でお集まりになったときに、当時をふり返り、お話をおうかがいしました。

当時のくらし

久保田：イナゴ掴みや、マキ拾いに行くときによ、いわゆるブドに食われてよ。足や手が草にまけたようになった人がたくさんおられました。

Z：田舎の人間はね、みな、免疫性がでけた一さかいに。

鳥居：僕はね、あの最初田植えの苗代の虫採りに入った時に、ヒルがつくのがどうしても我慢できなかったですね。

S：誰やらは、しもやけがひどかったなあ。

T：最初は冬の寒さが珍しいからね。その冷たさは、何にも気にならなかった。しばらくしたら、辛抱する以外になかったですもんね。やっぱりよう我慢しました。

久保田：そうやね。今の小学校4年生では、考えられへんわな。

みんなで替え歌

木津：夕方になるとやっぱりみんな寂しかったんや

な。お寺の縁側や、階段へずっと腰掛けて、誰か
らともなしに歌うとて、「かあちゃん今頃何してる」
て、言いもってあんたたち、替え歌歌ってたやろ。

M：「軍隊生活」の替え歌やな。

S：よう、そこの階段座って、みな歌いましたね。

R：しかし、あんな辛抱ようしたね。

H：いや本当にそう。よく1人でできたと思います
な。

R：時代やからみんな、辛抱できたんですね。

Z：まあ、ひどい時代でしたな。

八日市飛行場

M：飛行場はもう、今は全然わかりませんなあ。橋
渡って行ったん覚えてるわ。ほで、荷物運びさせ
られた。先生が大阪へ帰るときに、八日市駅まで
荷物自転車のうしろ積んでな、よう行かされたわ。

Z：いや、はじめのうちは、大事にとってすぐに警戒
警報出しますやろ。ほんなんしてたら、朝から晩
まで出るようになってしもたさかいに。警戒警報
やってたら仕事も何もできませんのでな。

M：グラマンが、雲の上からエンジン切って滑走し
てきてやな。いきなり攻撃してくるって言われて
たし。

H：ほして、一遍体当たりしたことあったしな。体
当たりをね。

Z：B29 は、ここらには爆弾落しませんかったし、
よかったけどね。

脱走した友達

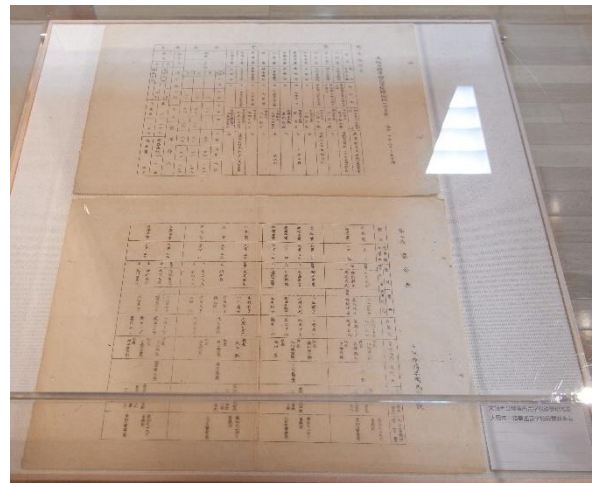
R：一緒に疎開に行った小島君が、一度裸足で脱走
したことがありましたね。

木津：大阪行きの切符買って乗ったらいいですね。
あの時、私もすぐ愛知川の駅へ行ったことを覚え
てるわ。ほんでそれを先生が迎えに行かれました。
朝のラジオ体操の時にはいたらしいんですけど、
そのスキねらって脱走したみたい。先生、大あ
わてでうちの自転車に乗って愛知川の駅へ走られ
たんです。愛知川の駅へ行ったら、さっき行った
あの電車に乗ったらいいちゅうことがわかったん
ですよ。すぐ車掌に連絡して、高宮で降ろして
もらって、先生が引受けに行かれました。

Z：よっぽど帰りたいかったんでしょうなあ。

M：そら、到着してから半分くらい泣いとったよう

な気がするわ。



大阪市立精華国民学校疎開現地表、寮舎表

【大阪より：疎開の子ども座談会】

愛荘町信光寺での思い出②

木津龍尊さん（愛荘町）たち

12月7日にあった地震

S：昭和 19(1944)12 月 7 日に大きな地震がありま
した。8 日にある耐久運動会の練習で、学校で分
列行進の練習してたら大きな地震がありました。

久保田：あの地震はひどかった。

S：ほれで、帰ってきたら、あの渡り廊下で育てて
たカボチャがいっぱい落ちとったんや。それから
しばらくは、カボチャご飯にカボチャのお汁、カ
ボチャの煮つけ。あの時分はおいしかったですね。
甘くて、カボチャご飯に宇治の昆布茶。

H：置いてあった水そうの水が、縦になったかと思
うくらい揺れとった。

S：学校の防火用水も、ようけこぼれたの覚えてる
わ。

空襲警報

M：それであの、空襲警報の時、みな泣いてまし
たなあ。私も布団かぶって泣いていたかもわから
んなあ。

木津：私はもうあの晩は、もうほとんど寝ずにいま
した。

M：夢見るねん。でも、まさか滋賀から見えませ
んわな。大阪が焼けてるの。

木津：四日市が焼けるときには、空が真っ赤に見え
ました。

M：それと混同してるにや。

久保田：鈴鹿の山の向こうですからね。

Z：四日市には、昔は海軍の燃料所があったんや。

久保田：空襲の時には鈴鹿の山が真っ赤になってたな。

Z：山の向こうが真っ赤いけやったなあ。わしも午前3時か4時頃やった。夜中に見てた。

T：B29も、玄関のところでよく見たもんです。Kさんと「あっ、またきやがったなあ」て。

Z：通ってるだけやでな。

久保田：飛行雲みたいなやつが、ずーと引いてな。

非常に注意すること

T：あのね、疎開生活の中で、非常に注意すべきことだったのは、寝小便と下痢やったね。寝小便はもうみんなからもう、笑い種にされますからね。しばらくは辛い。下痢もね、「もうあんたは下痢だから」って白い御飯いわゆる御飯は食べさせてもらえなかったんです。おかゆさんになるんです。おかゆさんになると、すごくお腹が減るわけです。辛抱できんわけですね。それはそれでまた辛い。だから下痢でも、下痢とは言いませんでした。

K：下痢とは言わなかったね。

T：言ったらよけいお腹が減るからね。そういうのが信光寺の次の、小椋ではありましたね。

T：私なんか小椋で、お腹が減ったからゆうて、畑の麦を採りましてね、実を食べたですよ。ところがね、決まって下痢しましたね。

鳥居：ほんでも、麦踏みは覚えてますよ。麦踏みやったね。

信光寺から突如3月31日に西小椋村へ移動

木津：昭和20(1945)年3月14日の(大阪)空襲で全部焼けてしまって、そうして皆さんの考え方もすっかり変わって、あるいは山の方へ移転して、身の安全を期せられたのかなという邪推をしてしまいました。皆さんと一緒に暮らしたのにね、どんな理由で移動させられるのかということですね、「取扱が悪かったんか」という反省までしてね。本当に淋しかったですね。

鳥居：そんなことはない。でも、小椋へ行ってからは生活が厳しかったね。

R：小椋で寝泊まりした寮は、村の集会所でした。

だから、こんな暖かい所じゃないんですわ。それでまたね、ノミがたくさんおりましてね、大変なところやったですよ。食べるもんも厳しかった。

H：ほらまあ、どこへ行っても戦時中はノミくらいは当たり前やでな。

R：それで大阪を余計思い出して、淋しかったですね。豊国へ帰りたいなあ、という感じがしました。

第3章 「銃後」とよばれて 一戦時の暮らし

地域では、戦争を続けるために食べ物や金属などを差し出す「供出」や、戦地に行く兵士の見送り、空襲に備えた防空演習(火を消したり、ケガ人を手当てしたりする訓練)、国内が戦場になったときに備えて竹やりで敵をたおすための訓練などが行われました。

日々の生活は戦争によって影響を受け、変化していきました。こうした戦争を支える地域や人々は「銃後」とよばれ、その中心は女性たちでした。



パナー写真：銃後の暮らし

麻原康子さん提供

【戦時の暮らし：モノ不足】

役場の配給係

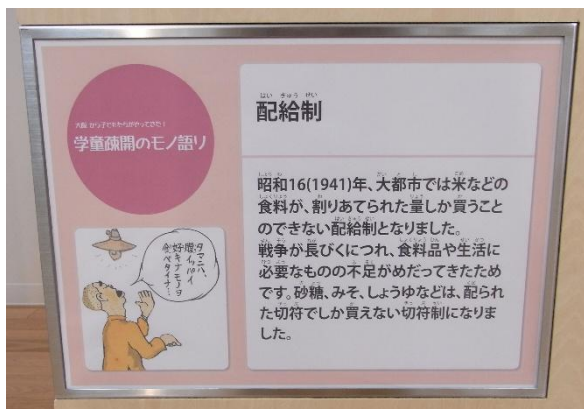
A子さん（米原市）

昭和19(1944)年より伊吹町（現在、米原市）の役場へ勤めはじめたAさんは、配給係になりました。当時の役場には、10人ほどが勤めていました。配給係は、支給される食料品や日用品を、農協や指定した店へ交換に行くための配給切符を、家族の人数割にして各区長さんへ届けることが主な仕事でした。青年になると、たばこも買える権利があるので、証明書の発行もしていました。

「妊婦の方にはコイがよう効くゆうて、コイを仕入れはったことがありました。紙をコイの目玉にペタペタはって、取りに来やはるように、配給した覚えがあります。あそこは『産めよ増やせよ』やったさかい。食糧難でも妊婦の方が栄養不足になるとあかん思って必死でした。」

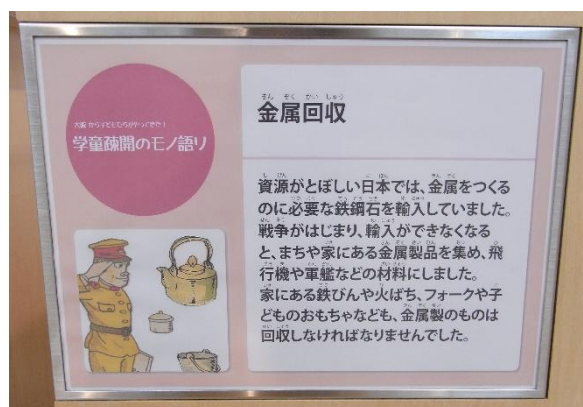


衣料切符

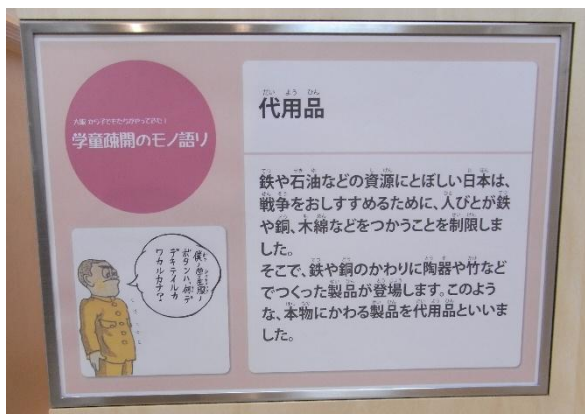


上：代用品の陶製釜

下：代用品の陶器製ガスコンロ台



代用品の貝製オタマ、陶製ボタン、陶製フォーク、陶製ナイフ、陶製おろし金



〔戦時の暮らし：モノ不足〕

戦争にかり出された家庭用品

Hさん（東近江市）

戦争が終わる少し前、東近江市のHさんは、家にあった真ちゅう（金属）製の宣徳火鉢を供出しました。その火鉢は大切な行事に使うもので、お正月でも使わず、よほどのおめでたいことなどのときに使う、特別なものでした。

「供出する日、下に付いていた木製の台をはずし、火鉢の部分だけを近くのお寺へ持って行きました。そこには、あちこちの家庭から持って来られた金属類が山のように積まれていました。」

Hさんが持って行った火鉢は、その場で村の人が金づちでたたいてこわしてしまっただけです。Hさんは「たぶん、二度と使えないように、また横流ししたり、持ちさられないようにするためだったのではないか」と思っています。



パナール写真：学校での授業風景

麻原康子さん提供



釣り鐘の供出

東近江市提

供

平田国民学校（現在の八日市西小学校）の運動場で撮影

〔戦時の暮らし：モノ不足〕

信光寺の釣鐘

木津龍尊さん（愛荘町）

東円堂（愛荘町）にある信光寺の住職だった木津龍尊さんは、戦争が始まったころ、近くにお住まいの方より、新しい釣鐘を寄進していただき、大変喜びました。しかし喜んだのも束の間。戦争が激しくなり、釣鐘と本堂のトユを、金属供出へ出さなければいけなくなってしまいました。供出した日の夜、とてもくやしくて、寄進してくださった方と本堂で泣き明かしました。

「戦争が終わってから、どこかに釣鐘が残っているかもしれないと手分けして探しに行きましたが、見つけることはできませんでした。結局、その場に残っていた他のお寺の釣鐘を2つ持ち帰り、長村（今の東近江市）で釣鐘を作っている金壽堂にお願いし

て新しく作ったのが、今あるものです。」



信光寺の釣り鐘が戻って来るまで

木津龍尊さん提供

供

終戦後、見つからなかった釣り鐘。残っていた他のお寺の釣り鐘2つから、新しく作ってもらいました。待ちに待った新しい釣り鐘が完成し、現在の場所へと移されるまでの光景が写真として大切に残されていました。

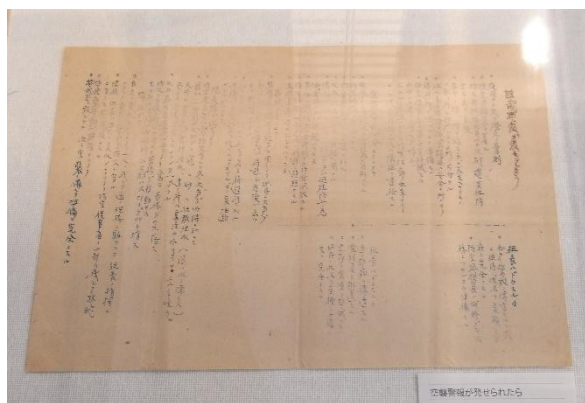


今も残る、終戦後新しく作られた信光寺の釣り鐘

木津順子さん提供



空襲警報発令中看板



「空襲警報が発せられたら」

【戦時の暮らし：空襲に備えて】

防空演習

Kさん（東近江市）

だんだん戦争が激しくなってくると、学校の校庭などを利用して地域でも防空演習をおこなうようにな

りました。警防団に指導を受けた隣組の組長や、国防婦人会などが中心となって、本土決戦に備えての訓練を、一週間に一回ぐらい行っていました。

「前線でも銃後も同じやということになって、町内で訓練しましたね。各組で、防空演習をやれということで、隣組の班長さんあたりが、「高度水中注水」とか声をかけて、バケツリレーで屋根に水をかけるわけです。でも、材料も何もないしね、爆弾を落とされたときのために、荒縄をほうきみたいにしてね、竹の棒に括って、火を消す訓練をしました。バケツもそれぞれの門口に置いてあって。」



千人針をする女性の写真、千人針、千人針用布の包装紙

【戦時の暮らし：日常の暮らし】

処女会と千人針作り

Sさん（甲良町）

尼子(今の甲良町)に住んでいたSさんは、18歳で村の処女会に入り、村のそうじや出征兵士の見送り、出征された方がいる家族の農業の手伝いなどをしました。

「村で出征される方があると、処女会へ千人針作りが頼まれ、1枚の千人針を分担して仕上げました。最初に針を入れ、1000個目までを一本の赤糸で縫い上げ、『最後に糸を切るときは、はさみを使わず歯で切ること』との指導も受けました。はさみで切ると、『縁が切れる』から縁起が悪いし、人の温かな気持ちを伝えるということもあって、いけないと言われました。」

「駅前とかに立ったりして、たくさんの人から縫っ

てもらってました。寅年の女の人は、年の数だけ縫い目を作ってもらえたが、あとは1人にひとつの縫い目だけ。1000個集めるのには、本当に苦労でした。」



左：上野欽一さんが国民学校2年生だった昭和18（1943）年6月14日から、昭和19年2月26日までに書いた絵日記
右：閲覧用の絵日記複製品

【戦時の暮らし：子どもの暮らし】

絵日記

上野欽一さん（彦根市）

昭和18(1943)年、彦根市の城西国民学校(今の城西小学校)2年生だった上野さんは、先生から言われて、絵日記をつけるようになりました。

「まだ小さくて、日記は毎日では書けませんので、先生から『絵日記を書くように』と、いつも言われてたんじゃないかな。絵を描くのに時間がかかるから、母親にテーマを選んでもらって、書いたものがたくさんあると思う。お弁当に、水筒に入れて持って行ったオジヤが、冷えて真空状態になり、ふたが取れなくなって私が泣いたので、上級生がみんなで取ってくれたことなど、出来事があったときは書きやすかったことは覚えています。」

【戦時の暮らし：子どもの遊び】

戦時中の遊び

大東礼子さん（大津市）

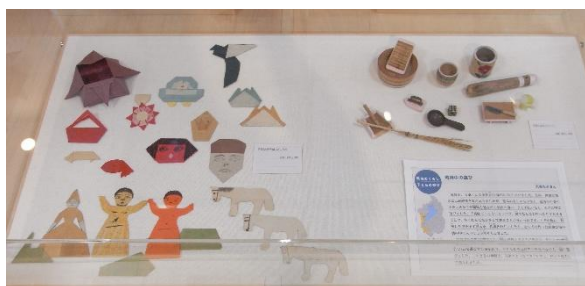
戦時中、大東さんは伊香立(大津市)に住んでいました。当時、伊香立地区には40軒ほど家がありました。遊ぶおもちゃも少なく、近所の小さい子を大きな子が面倒を見ながら学校へ通い、よく手伝いもし、その合間に遊びました。

「兵隊ごっこやチャンバラ、泥でだんごを作ったりするままごとや、かくれんぼなどをして遊ぶことが

多かったです。」

その他に、収穫した稲を干す稲束を、鉄棒代わりにしたり、むしろで作った粃運び用の袋の中に入れて土手滑りもしました。

毎年12月の第1日曜日に5〜6軒の母親と子どもが集まり、朝から夜9時頃まで1日を過ごす行事があり、子どもたちはおやつを食べながら一緒に遊びました。このときの仲間は、兄弟のようなつき合いをし、何かと協力して暮らしました。



子どもの折り紙などの作品、手製のままごとセット

【戦時の暮らし：戦時食】

今とは違うサツマイモとカボチャ

中澤光子さん（東近江市）

中澤光子さんは戦時中の昭和14(1939)年、八日市（現、東近江市）で生まれました。充分ではありませんが、毎食、食事が摂れました。しかし、食べるご飯の量がだんだんと減っていくと、少しでもお腹が膨れるよう、ご飯の中に色々な食材を混ぜました。痩せた土地でも栽培しやすいサツマイモとカボチャは、甘みがあっておいしく、またお腹を膨らすことができる食材でした。

「かさを増やさなならんし、カボチャは甘いですから、おいしいでしょ。でもね、今みたいに甘いことなかったんですよ。肥料がないしね、そして今みたいに十分に熟れるまで置いといたら、みんなに盗られてしまう。」

熟れる前に採ったカボチャは、甘みがでるよう、家で乾かして食べました。サツマイモも、筋だらけで今よりも細かったが、それでもおいしいとよばれていたそうです。



日本百貨店組合発行ポスター

「節米は気持一つで未だ出来る」（複製品）



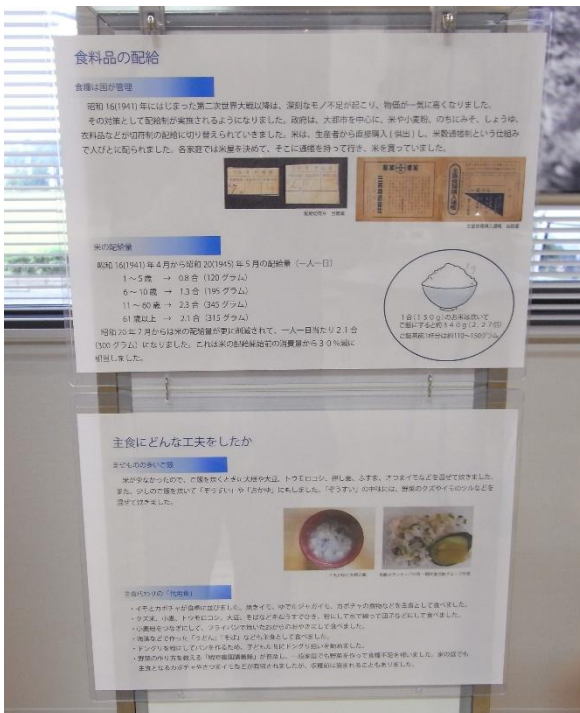
代用品の陶製鏡餅



戦時中の子どもが遊んでいたメンコ



上：お菓子の袋・ニッキの粉、下：家庭用菓子購入票

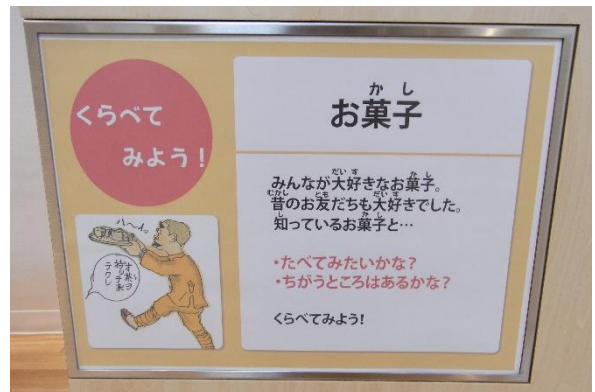


食料品の配給、主食にどんな工夫をしたか



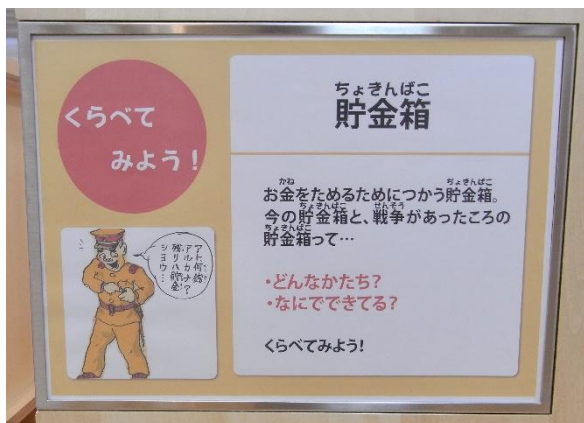
くらべてみよう！ 今のお菓子 昔のお菓子

左：戦争中のお菓子パッケージ、右：今のお菓子パッケージ



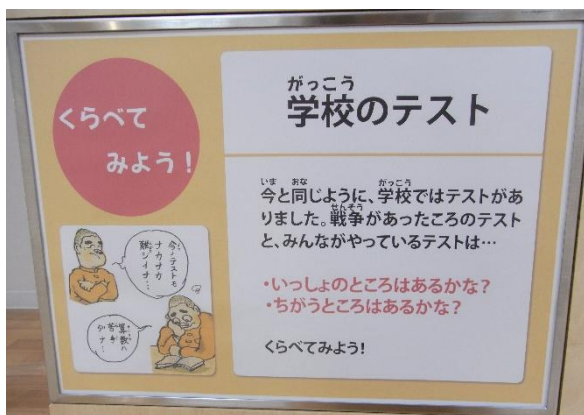
くらべてみよう！ 今の貯金箱 昔の貯金箱

左：戦争のころの貯金箱、右：今の貯金箱



くらべてみよう！ 今のテスト 昔のテスト

左：戦争のころのテスト、右：今のテスト



えっ！ これも食べてたの？！

祈念館のまわりでみつけた野草

今から約70年前の戦争があつたころ、戦争が長引き、人々の生活はだんだん苦しくなっていました。配給だけでは足りなくなり、家の近くの山や草むら、田んぼの畦や畑の縁へ、おかずにするために野草を摘みに行ったり、空腹をまぎらわすのに工夫を重ねました。どんな野草を食べていたのでしょうか？当時食べられていた野草を、祈念館のまわりで探してみました。

(参考：『食べられる野草』陸軍獣医学校研究部著、昭和18年)

「戦争中は、雑草も大切な野菜だった」など



えっ！ 牛はとっても働きもの



絵でみる子どものあそび



双六で遊ぼう！！

第4章 子どもたちが伝える戦時の出来事

学校から平和についての学習に訪れた子どもたちは、戦争を体験された方のお話や資料から、それぞれが過去を知り、平和な生活がどうすれば続くかを考えました。子どもたちが学び、子どもたちの視線から見た戦時の出来事を紹介します。



(令和8年5月編集)

第5回企画展示「学童疎開のモノ語り」(会期:平成25年6月29日～9月29日) 展示資料一覧				
プロローグ 集団学童疎開―戦火を逃れてやって来た子どもたち―				
No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	大阪市立中大江国民学校記章	1		池田喬子さん提供
2	疎開先へ持ってきたお茶碗	1		池田喬子さん提供
3	集団学童疎開関係書類綴り	1	大宝国民学校	個人提供
4	集団疎開児童名簿	1	大宝国民学校	個人提供
5	集団疎開保護者連絡名簿	1	大宝国民学校	個人提供
6	集団疎開保護者連絡名簿竝に面会日割表	1	大宝国民学校	個人提供
第1章 学童疎開を支えた人びと				
7	写真「昭和20年大阪南大江国民学校5年生疎開児童 日野町にて寮母さんとともに」	1		玉八初子さん提供
8	写真「疎開の子どもたち日野駅に到着」	1		玉八初子さん提供
9	写真「疎開の子どもたちや先生と寮の前で」	1		玉八初子さん提供
10	写真「昭和20年春、膳所国民学校で疎開の子どもたちと」	1	後列左が山口とし子さん	山口大介さん提供
11	武田倫江さんの絵日記	1	昭和19年9月11日	武田倫江さん提供
12	疎開の寮で使用した「久宝校」の焼印がある手製の一升ます	1		個人提供
13	疎開の子どもたちが使用した食器	1		個人提供
14	大阪市立北大江国民学校延光院寮の門標	1		個人提供
15	米田芳信さんが引率の先生として疎開して来た高月町圓行寺で記録したアルバム「銀杏」	1		高月町図書館
16	米田芳信さんが引率の先生として疎開して来た高月町圓行寺で記録した「寮日誌」	1		高月町図書館
17	「大阪市桃園国民学校疎開児童宿舎」門標	1		明德寺提供
18	寮母である神田さんへ大阪市長から送られた礼状	1		明德寺提供
19	神田さんが寮母になったときの辞令	1		明德寺提供
20	疎開児童保護者から寮母の吉坂さんへの礼状	1		吉坂ちゑさん提供
21	写真「疎開当日」	1		吉坂ちゑさん提供
22	写真「薪あつめ」	1		吉坂ちゑさん提供
第2章 疎開先での出来事				
23	写真「昭和19年、疎開先の息長村(米原市)の天の川河原にて大阪市立桃園国民学校5年生男子」	1		長野景昌さん提供
24	写真「昭和19年、疎開の寮だった明德寺にて大阪市立桃園国民学校3・4年生女子」	1		長野景昌さん提供
25	写真「疎開先の箕浦橋のたもとで友人と」	1	右側が長野さん	長野景昌さん提供
26	写真「疎開当時、5年生男子の寮だった公会堂(現在は空き家)」	1		長野景昌さん提供
27	写真「疎開当時、6年生の寮だった宝福寺」	1		長野景昌さん提供
28	6年生のときにみんなのお世話係として任命された「興亜部長」の任命書	1		池田喬子さん提供
29	池田喬子さんが疎開先へ持ってきたもの	一式	お守り、書道用水差し、おはじき、裁縫道具(はさみ、糸巻き)、「大東亜」貿易ゲーム盤	池田喬子さん提供
30	今、市販されている「強力わかもと」	1		個人提供
31	疎開中に坂本正邦さんが書いた絵日記	1		坂本正邦さん提供
32	Yさんが疎開していた今津町泉慶寺で寮母さんが記録した「寮母日誌」	1		個人提供
33	Yさんが疎開していた今津町泉慶寺で寮母さんが記録した「炊事日誌」	1		個人提供
34	食品サンプル(サツマイモご飯、漬け物、白菜のおひたし)	一式	「炊事日誌」参考。当館ボランティアの会・戦時食体験活動グループ協力	当館
35	疎開児童用長机	1		栗原 基さん提供
36	当時の教科書・文房具	一式		個人提供
37	当時の児童の服装	一式		個人提供
38	父から秋元一三さんへの最後の手紙	1		秋元一三さん提供
39	疎開の子どもたちが使用した竹製のものさし	1		個人提供
40	疎開の子どもたちが使用した手製の机	1		個人提供
41	武運長久えんぴつ・箱	一式		個人提供

42	日本海軍えんぴつ	一式	個人提供
43	疎開先のM子さんより大阪の両親へのハガキ	4	個人提供
44	写真「疎開先で、初めての面会日記念」	1	宮川千代子さん提供
45	兄から疎開先の宮川千代子さんへ送ったハガキ	2	宮川千代子さん提供
46	疎開先の園木邦子さんより大阪の両親へのハガキ	一式	園木邦子さん提供
47	一足先に大阪へ戻った姉から滋賀に残る池田喬子さんへ送った手紙	1	池田喬子さん提供
48	父から疎開先の池田さんへ送った手紙	1	池田喬子さん提供
49	母から疎開先の池田さんへ送った手紙	1	池田喬子さん提供
50	疎開先の池田さんより大阪の両親へのハガキ等	一式	池田喬子さん提供
51	疎開先で家族への手紙を書いた万年筆	2	池田喬子さん提供
52	由上龍男さんが引率の先生として疎開していた、マキノ町で記録したアルバム	1	由上龍男さん提供
53	写真「引率した疎開の子どもたち」	1	個人提供
54	大阪市督学官が引率教員に送った励ましの手紙	1	個人提供
55	大阪市督学官が引率教員に送った励ましのハガキ	1	個人提供
56	子どもたちの留守宅へ送られた「通信 疎開だより」	1	中野由紀子さん提供
57	子どもたちの留守宅へ送られた「通信 疎開だより」最終号	1	中野由紀子さん提供
58	父 中野良数さんから寮母の吉坂ちよさんへ送られた手紙	1	中野由紀子さん提供
59	大阪市立精華国民学校疎開現地表	1	個人提供
60	大阪市立精華国民学校疎開寮舎表	1	個人提供

第3章 「銃後」とよばれて一戦時の暮らし

61	衣料切符	一式	個人提供
62	代用品の陶製釜	1	國友義一さん提供
63	代用品の陶器製ガスコンロ台	1	個人提供
64	代用品の貝製オタマ	1	個人提供
65	陶製ボタン	一式	個人提供
66	陶製フォーク	1	個人提供
67	陶製ナイフ	1	個人提供
68	陶製おろし金	1	個人提供
69	空襲警報発令中看板	1	出雲一郎さん提供
70	「空襲警報が発せられたら」	1	上野欽一さん提供
71	千人針をする女性の写真	1	個人提供
72	千人針	1	個人提供
73	千人針用布の包装紙	1	個人提供
74	絵日記	1	上野欽一さんが国民学校2年生だった昭和18(1943)年6月14日から昭和19(1944)年2月26日までに書いた絵日記
75	子どもの折り紙などの作品	一式	出雲一郎さん提供
76	手製のままごとセット	一式	出雲一郎さん提供
77	ポスター「節米は気持一つで未だ出来る」	1	日本百貨店組合発行(複製品)
78	代用品の陶製鏡餅	1	出雲一郎さん提供
79	戦時中に子どもが遊んでいたメンコ	一式	個人提供
80	お菓子の袋・ニツキの粉	一式	個人提供
81	家庭用菓子購入票	一式	個人提供
82	戦争中のお菓子パッケージ	一式	個人提供
83	今のお菓子パッケージ	一式	個人提供
84	戦争のころの貯金箱	一式	出雲一郎さん提供
85	今の貯金箱	1	個人提供
86	戦争のころのテスト	一式	武田倫江さん提供
87	今のテスト	一式	個人提供

第4章 子どもたちが伝える戦時の出来事

88	子どもたちの平和学習成果物	一式	個人提供
----	---------------	----	------